

2021年度

空間演出デザイン学科

カリキュラム評価結果報告書

2023年3月

京都芸術大学 芸術学部 空間演出デザイン学科

カリキュラム評価委員会

目次

カリキュラム評価委員会委員名簿.....	p.1
----------------------	-----

総評.....	p.2
---------	-----

評価結果

I. 理念・目的.....	p.4
---------------	-----

II. 学生の受け入れ.....	p.4
------------------	-----

III. 教育研究活動

1 [教育目標・ポリシー]	p.5
---------------------	-----

2 [教育体制]	p.5
----------------	-----

3 [体系的カリキュラム]	p.6
---------------------	-----

4 [教育内容・教育方法]	p.7
---------------------	-----

5 [学修支援]	p.7
----------------	-----

IV. 学修成果・教育成果

1 [教育成果]	p.8
----------------	-----

2 [進路状況]	p.9
----------------	-----

V. 内部質保証.....	p.10
---------------	------

2021年度

京都芸術大学 芸術学部 空間演出デザイン学科

カリキュラム評価委員会 委員会名簿

委員長（代行）：藤田謙

（東北芸術工科大学 美術科工芸コース／教授・コース長 入試部長）

委員：柚木泰彦

（東北芸術工科大学 プロダクトデザイン学科／教授 高大連携推進部長）

中島英博

（立命館大学 教育開発推進機構／教授）

松井創

（株式会社ロフトワーク／Layout Unit CLO）

総評

社会情勢が複雑化する中で私達の暮らしはますます多様になってきている。人間のいる空間はコロナ禍によって形を変えざるを得なくなった。人々は混乱し対応に迫られ、手探りながら様々な方法を試してきたが、そうした中から優れたデザインも多く生まれた。このような時期に空間演出デザイン学科の外部評価を行ったことは、ある意味で必然であったかのように思われる。空間演出デザイン学科が掲げる「人を取り巻く空間をより豊かにするデザインで社会に貢献する」という設立当初の目標は今の時代にこそ生かされるべきだと考える。そして、近年の目標である「社会の課題をデザインで解決し、多様性を前提に新たな社会価値を創造する（要約）」は、まさにこれからの時代に必要とされる視点と感じている。以下、項目ごとに評価の概要をまとめる。

学科の教育目標と大学の理念は整合性が取れており「優れた取り組みが見られる」と評価された。その中でも学科に関わる教職員への周知、学科外へのウェブサイトなどでの周知が徹底されている点は高く評価された。その一方、学生の受け入れでは、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの見え方が少し複雑であり、それぞれが体系的に見える工夫が欲しいと委員から意見が出された。学生募集、入学者選抜については、アドミッション・ポリシーとしっかり連動しており、志願者にも適切に伝わっている印象を在学生へのインタビューからも読み取ることができた。

教育研究活動においては、教育体制、教育方法、学修支援は特に優れた取り組みが多くあり、在学生に対する教育の質の保証ができています。専任教員は自身の専門について、複数領域を横断的に教育することを明確にし、学科の教育目標として掲げるソーシャルデザイン領域の研究にも取り組んでいる。また、各教員の学科に関わる研究活動がしっかりと授業に反映されており、リアルな教育が行われている点はこの学科を支えている重要な要素だと感じた。初年次教育や芸術教養科目について育成する人材像に必要な科目として十分に位置付けられていないと指摘された点は、学科単独の問題ではなく専門教育を重要視する傾向にある芸術大学全体の問題だとも言える。

学修成果・教育成果については、授業改善アンケート項目の満足度が高い点が「優れた取り組みが見られる」と評価されている主要因の1つと言える。また、入学前の段階から学科の学びを明確化している点も一つの教育成果ではないかと感じた。進路決定率4年連続100%達成は大変素晴らしい成果であり、その内容も含め学科の最大の強みとなっている。学生面談では作家、起業を視野に入れている学生もおり、委員の先生から新たな進路としての可能性が指摘された点は今後も期待できる。

全体を通して細部に至るまでデータの収集、検証が進められており、それらを分析、可視化している点は高く評価された。内部質保証については大学全体より先んじて様々な取り組みを行っている。優れた取り組みは学科に留まらず大学全体、もしくは外部との関わりにおいて反映されることを期待する。

最後に、膨大な自己点検評価資料を報告書として読み取りやすく編集された廻先生はじめ作成に関わられた教職員の皆様には、深く感謝の意をお伝えいたします。また、外部評価委員会に外部の有識者として快くご参画いただき、適確な評価、助言を賜った立命館大学 中島英博先生、株式会社ロフトワーク 松井創氏、姉妹校である東北芸術工科大学 柚木泰彦先生には心から感謝申し上げます。

2023年3月

委員長（代行） 東北芸術工科大学教授 藤田謙

I. 理念・目的

1 学科の教育目標、人材育成目標は大学・学部の理念・教育目標に照らして、適切に設定し、教職員、学生、社会に周知、公表しているか

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

学科の教育目標、人材育成目標は大学の理念と整合的に定められており、適切に設定されている。また、ウェブサイトやガイダンス資料等を通じて学内外に適切に周知されている。

〈優れた点〉

○非常勤教員に対して講師会を開き、学科教育目標や教育の質保証に関する大学の取り組みまでを周知・共有している点は大変優れた取り組みとして高く評価できる。

II. 学生の受け入れ

1. 求める学生像および入学者選抜の基本方針（アドミッション・ポリシー）を明示し、公正かつ適正に学生募集および入学者選抜を行っているか

【評価】 4（よく出来ている）

〈理由〉

アドミッション・ポリシーは学びの3観点をもとに構成され、高等学校段階を卒業した多様な志願者を受け入れる方針として適切に定められている。とりわけ、主要な選抜方法である体験授業型選抜では、アドミッション・ポリシーに沿って選抜を行う工夫がなされており、明確な評価基準、具体的な評価課題が設定され、優れた取り組みと言える。

〈参考意見〉

受験生が、アドミッション・ポリシーとあわせて、上位概念となる教育目標やDP・CPを体系的に理解できるよう、WEBサイトの構造を工夫してはどうか。

2. 学科魅力（特色）には訴求力があり、適切な入学者数を確保できているか

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

志願者状況は令和2年度に増加し、その後も大きく下がることなく維持できている。全入試の直近5年間の志願状況は3倍を超えており、学科の特色が受験生に十分伝わっており、訴求力があると判断できる。また、直近4年間の定員充足率は1.0を上回っていることから、入学定員充足率は適切に管理できていると評価できる。

〈優れた点〉

○学科の特色を3つの領域に絞り明確にしている。コースリーフレットを通じて学科の教育目標やカリキュラムの特徴を示すことで、何を学ぶ学科なのかを分かりやすく伝えている点は評価できる。また、進路成果が大変優れており、進路先企業をすべてパンフレットに掲載し、オープンキャンパスで伝えるなど、4年間の学びと進路が一貫して繋がっていることを、受験生や保護者に提示できている点は高く評価できる。

Ⅲ. 教育研究活動

1 [教育目標・ポリシー]

【評価】 4（よく出来ている）

〈理由〉

教育目標やディプロマ・ポリシーは大学の理念、並びに学校教育法の趣旨に沿って適切に定められている。また、学生が習得する能力を具体的な7つの領域に明確化し、カリキュラムの編成方針に活用しやすくする工夫を行っている。カリキュラム・ポリシーは、学生の主体的な学びのベースとなる初年次教育に始まり、進路教育まで、段階的かつ適切に編成されていることがわかる。

〈参考意見〉

カリキュラム・ポリシーは、科目の種類による区分が説明されているが、7つの能力を育成するための方針であることが読み取りづらい。ディプロマ・ポリシーとの関連を明確に説明できると良いだろう。

2 [教育体制]

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

学科のカリキュラムを基盤として、専門領域を専門系（空間・ファッション）、クリエイション系、総合系（ソーシャルデザイン）の3領域に構造化し、それぞれを横断的に教育できる教員組織の編成、および非常勤教員の任用等に取り組んでおり、他の学科や他大学の参考となる非常に優れた取り組みがある。

学修環境として、ホーム教室、シルク室、ミシン室、ジュエリー工房があり、教育課程の特徴に応じた教育環境が十分に整えられており、教育成果の向上に重要な役割を果たしていると推察できることから、教育研究活動を行う環境や条件は適切に整備されていると言える。

〈優れた点〉

- 専任教員は自身の専門領域だけでなく、複数領域を横断的に教育することを方針として明確にしている。それにより、教員全員が各科目の相関関係を体系的に理解し、教育目標の達成のための組織的なカリキュラム運営体制を構築している点は高く評価できる。
- 専任教員全員が、学科合同授業、講義科目、メソッド科目を担当することは、教員の教育力向上の取り組みとしても重要な役割を果たしていると高く評価できる。
- 専任教員は自身の専門領域に加え、学科の教育目標として掲げるソーシャルデザイン領域の研究に取り組んでおり、その研究成果は教育内容へ還元される仕組みとなっている。また、成果が継続的に向上するよう、教員業績評価の目標としても設定されている点とあわせて、高く評価できる。

3 [体系的カリキュラム]

- ① DPとカリキュラムとの連関（教育目標との整合性、スコープ）
- ② CPとカリキュラムとの連関（順次性・系統性、シーケンス）
- ③ 教育研究目的（学術分野）に対する教育内容・水準の適切性

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

学科の専門科目は、育成する人材像に沿って体系的に編成されるとともに、学生への周知に取り組んでおり、優れた取り組みと言える。科目を通じて育成する能力の重みづけがカリキュラムマップとしてまとめられており、体系的なカリキュラムを編成するための工夫がなされている。とくに、コース別の年次進行・授業の順次性を明示している点は優れている。

〈優れた点〉

- 卒業研究・制作は、学科教育目標を科目の到達目標とし、学修成果の質を担保するための学科規定を設けている。ガイダンスや毎月の審査を通じて、学生の統合的な学習を継続的に支援する仕組みを持っており、とくに優れた取り組みと言える。それらが卒業研究・制作の優秀作品として成果につながっている点は高く評価できる。

○学科キャリア科目を開講し、体系的に運用している点は、他機関の参考となる優れた取り組みであり高く評価できる。

〈参考意見〉

企業が今後必要とするのは、異分野とのコミュニケーションや新結合（イノベーション）ができる人材であり、STEAM教育のように、アートやデザインを基点として、他分野（科学や数学、エンジニアリング、プログラミング、テクノロジー、またサーキュラー・デザインを学ぶ上での生物学や化学や物理学等）に対する最低限の知識的理解や興味関心を涵養できると良いだろう。

4 [教育内容・教育方法]

- ① シラバスに基づいた授業の実施
- ② 成績評価
- ③ 単位認定
- ④ 教育方法の工夫・開発と効果的な実施

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

シラバスの作成において、学科でまとめたカリキュラムマップにそって作成する仕組みが用意され、科目開講の順次性・体系性に沿ったシラバスが作成されている。到達目標を組織的に作成するとともに、担当教員がそれらを具体化して評価基準を作成している点は、科目の順次性・体系性を組織的に保証する優れた取り組みと言える。シラバスのピアチェックも、学科専任教員間で、カリキュラムの趣旨に沿うように点検や査読が行われており、適切に修正する仕組みを機能させている。

成績評価は、学部の成績評価ガイドラインに基づき適正に行われている。また、主要科目にはルーブリックを導入し、評価基準の明確化が図られている。単位制度に求められる事前事後学修についても、十分な学修が行われる工夫があり適切に運用されている。

〈優れた点〉

- 事前事後学修については、GoogleClassroomを用い、演習系科目では制作プロセスの確認を行い、講義系科目では毎回のノート提出及び学修時間記録を義務づけている。事前事後学修内容が成績評価にもつながっている点や、学生の時間管理に良い影響を及ぼしていることが推察され、高く評価できる。
- 教育方法の工夫として、社会と双方向の授業を多くの科目で取り入れており、他機関の参考になる優れた取り組みとして、高く評価できる。

5 [学修支援]

- ① 学修支援体制

② キャリア支援

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

学修支援については、DPAガイダンスを行い、教育目標やカリキュラム・ツリー、学位プログラムについて学生が理解できるようにしている。また、リテラシー科目において、履修した科目とDPとの関連や、成績評価と自己評価の結果について分析・考察するためのレポート課題を課し、何を学んでいるのかを学生自身が言語化し、学修を振り返る機会としているところは優れた取り組みである。学修面談については、学生の状況に応じて丁寧に行われていることが伺える。

キャリア支援についても、一人ひとりにきめ細やかな指導がなされている。特徴的な取り組みがあるわけではないが、学生募集段階から教育目標を浸透させ、授業を通じて一貫した進路教育が行われていること、キャリア授業の単位修得率も高く、進路意識が十分涵養されていることが、高い進路決定率の維持に結実していると推察される。

〈優れた点〉

- 毎月行われている「卒業制作・研究」の審査や、社会実装科目での指導、授業時間外の工房の活用なども優れた学修支援として機能しており、高く評価できる。
- 「自ら考えて動ける」「自ら学ぶ主体性」を持つ人材は、企業が求めるものであり、学び方を学び（ラーニング・リテラシー）、内省や振り返りができる学生を育成している点は高く評価できる。

IV. 学修成果・教育成果

1 [教育成果]

- ① 教育内容・学修指導
- ② 教授力
- ③ 初年次教育力
- ④ 標準年限での卒業率
- ⑤ カリキュラムの各段階に応じた目標達成度

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

教育内容・学修指導については、学生生活・学習アンケートの満足度評価も高く、とくに学科が教育目標に掲げる「問題を見つけて解決法を考える力」が身についたと回答する学生比率

が高くなっている。卒業制作においても、実際に問題解決に至っている作品もあり、学生の学修成果、満足度ともに高く、学生生活が充実していることが見てとれる。

教授力については、指標となる授業改善アンケート結果は学部平均を上回っており、アンケート結果に基づき授業内容や教授法、授業運営の改善が常に行われていることは評価できる。

初年次教育においては、学生募集段階からの教育目標の浸透とあわせて、学生自身が何を学んでいるかを言語化できるよう、具体的な論述の機会を設け習慣化に取り組んでいることが、導入教育としてよく機能しており、初年次離籍率改善といった成果に繋がっていると見える。

標準修業年限での卒業率は、80%に届かず課題となっていた。理由として「学科の学修内容に対するミスマッチと健康上の理由で学修継続が困難な学生が多く、領域横断で様々な学んでいくことについていけず、退学する学生が多かった」と分析しているが、ミスマッチを防ぐ施策として、2019年度入学生の学生募集から、学科の教育目標やカリキュラムの特徴を明確にし、何を学ぶ学科なのかを分かりやすく伝えるアプローチを取り入れた。結果として、2019年度入学生の標準修業年限卒業率は大幅に改善の見込みとなっている。2020年度入学生の入学時PROG結果を見ても、基礎学力（言語処理能力、非言語処理能力）や構想力など、課題解決に求められる能力を身につけた学生が入学していることが分かる。学生募集の改善のみが離籍率改善の要因とは言えないが、入学後の教育や学修支援とあわせた学科教育の成果であると言える。

〈優れた点〉

- 卒業研究・制作については、実際に社会課題に対して創造的解決を実現する作品が出ており、学修成果として高く評価できる。メディア等社会からの関心も集まっているが、今後さらに社会からの評価・批評を得られるような機会を設計できると、芸術系のソーシャルアントレプレナー等、社会で広く活躍する人材を輩出できるのではないかと期待する。

2 [進路状況]

- ① 人材育成目標に対する達成状況
- ② 進路決定率と進路指導の改善
- ③ 進路の質向上のための学部目標の達成状況

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

学生の進路については、進路決定率は4年連続100%と秀逸な成果であり、学生が希望する進路へ進めていると言える。さらに、進路の質が高く安定している。とくに専門職のみならず、総合系職種にも広く進路を開拓し、社会の多様な分野で卒業生が活躍していることは高く評価できる。

カリキュラムと進路先（進路パターン）が一体化していることは、学生だけでなく受験を考える高校生にも一貫した学びの魅力を伝えており、学科の大きな強みとなっていると言える。

〈優れた点〉

○学生の就職支援のための情報を教員間で共有し、学生の指導やガイダンスに活かすなど、組織的な学修支援体制が整っており、教員組織が同じ目標を共有し、議論できていることは非常に高く評価できる。

〈参考意見〉

就職とは別の指標となるが、ソーシャルアントレプレナーの創出も学科が目指す目標として検討してはどうか。すべての企業がCSVやソーシャル・インパクトを見出せないなか、学生が起業し実践していくことも、当学科の可能性としてあるのではないか。

V. 内部質保証

1. 学修成果・教育効果の検証方法

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

学修成果・教育効果の検証については、大学全体の取り組みとして組織的に取り組んでおり、適切に進められている。教育計画では、目標だけでなく達成基準も設定され、自己評価を具体的な改善や行動に移す仕組みとなっている。また、学科独自でも学修成果・教育効果をデータに基づき検証し、授業改善アンケートの結果をもとに学科内でも授業改善計画書の作成に取り組むなど、他学科に先行した実践も見られる。学科組織レベル・教員個人レベルでの自己点検・評価は、「教員業績ポートフォリオ」に基づいて厳格に行われており、内部質保証に向けた組織運営は適切に行われていると言える。

〈優れた点〉

○講師会や学科会議、シラバスピアチェックや授業改善計画書等を通じて、教育目標の共有や現状の点検・評価の機会を定期的に設けている。それにより、非常勤講師までを含めた教員組織が一丸となり、常に教育のPDCAサイクルを機能させている点は、他機関にも参考となる非常に優れた取り組みであり、非常に高く評価できる。

〈参考意見〉

学科には、さまざまな面で優れた取り組みが見られ、大変優れた取り組みであると言えるが、専任教員に過度なエフォートを求めるものになっていないか懸念される。教育内容、教育方法の質向上にはひきつづき専任教員の関与が重要であるが、学修支援や進路支援においては、全学的な支援を充実させる資源配分があっても良いのではないか。